

Wilmina AI Data Science Literacy Program

自己点検・評価報告書

2026年3月

大阪女学院大学

大阪女学院短期大学

2022(令和4)年度より取り組みを始め、2023年8月に文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベル)」の認定を受けたWilmina AI Data Science Literacy Programについて、構成科目である「AI・データサイエンス基礎(以下、本科目という。)」を中心に、2025年度の自己点検・評価を実施した。評価項目は、同制度の「実施要綱細目」3の(2)及び、(6)、ならびに情報公開に関する内容に準じた。

I. 評価体制について

本学のカリキュラムセンター(カリキュラム統括部)は、教育課程における内部質保証の責任担当組織である。本学の共通教育科目群(研究・調査の方法及びコアエリア情報)を含むカリキュラムを構成する授業科目及び授業科目群に関する施策の企画・立案・運営・点検・改善を目的とし、活動している。

II. 学内からの視点

1. プログラムの履修・修得状況、学修成果に関する事項

- ・大阪女学院大学、大阪女学院短期大学(以下、本学という)では、数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度の目的を踏まえ、AI・データサイエンス教育は次世代を担う学生にとって不可欠であると考え、2022年度入学生より、大学(国際・英語学部)及び短期大学(国際コミュニケーション学科)の1年次全学生を対象とする必修科目として本科目を開講した。これにより、本科目は学部・学科に関わらず、本学の1年次の学生が広く履修する教育プログラムとして位置付けられている。
- ・学習効果の向上を目的として、今年度より対面授業を導入した。学生には、e-learningサイト上での事前学習と対面授業での活動を組み合わせた反転授業形式で学習を進めることを説明した。
- ・学修成果を高める取り組みとしては、学生に全15回の動画視聴と視聴後の確認テストで満点取得すること、学びのふりかえりを提出し、クラスメイトとの相互コメントを行うこと、第9~12回の授業ではエクセルを利用し、実データを題材とした演習と成果物の提出を求めた。具体的には、データの整理、可視化、解釈を行う活動を通して、モデルカリキュラムが示す「データを読む」「データを説明する」「データを扱う」といった基礎的なデータ活用能力の育成を図った。e-learningによる学習では、動画視聴を繰り返し行うことができ、自分のペースで学習を進められることから、一定の学習効果が得られた。
- ・2025年度は履修者155名を6クラスに編成し、さらに小グループに分けて学習を進めた。反転授業を用いて、学生は事前に動画教材を視聴し、理解度を確認するためのクイズを受けたり、考えを共有したりした上で

授業に参加した。授業では、グループでの話し合いや全体共有、具体的な事例紹介などを通して学びの定着を図った。分からない場合や、思うように進めなかった場合は、対面サポートを受ける方法により、学生同士で助け合いながら、進めていくことができた。

- ・修了率は、大学は昨年とほぼ同じ 86%、短大は昨年の 87.5%より多く上がり 96.4%である。合計平均は 89.9%であり、長欠者や再履修生を含めても履修者のほぼ 9 割が単位修得しているとみられる。2025 年度の単位未修得者については、翌年再履修させている。注 1)

注 1) 履修・修得状況 ()内は昨年度

	大 学	短期大学	合 計
履修者	93 名 (128 名)	56 名 (48 名)	149 名 (176 名)
修了者	80 名 (110 名)	54 名 (42 名)	134 名 (152 名)
修了率	86.0% (85.9%)	96.4% (87.5%)	89.9% (86.3%)

2. 学生アンケート等を通じた、学生の内容の理解度・後輩等他の学生への推奨度

- ・本科目でも全学的に実施している授業アンケートを実施し、そこに含まれていない質問に関しては、オンライン上のフォームでアンケートを実施した。回答者数・回答率は、全学授業アンケートが 123/155 名・79.35%、オンラインアンケートが 136/155 名・87.74%であった。結果は、以下の注 2) および注 3) のとおりである。授業への意欲、内容や進度、教材の適切性、総合的な満足度について、いずれも概ね肯定的な結果が得られた。特に、授業内容や進度については肯定的回答が 87.8%、教材については 84.5%、総合的な満足度については 84.5%となり、多くの学生が授業内容を適切かつ有意義であると評価していた。
- ・データサイエンス・AI に関する独自アンケートでは、「私はこの授業を受講して、データサイエンスという領域に興味・関心を持った」に対して 75.7%が肯定的に回答した。また、「私はこの授業で身につけたデータサイエンスの知識を自分の将来に活かせると思う」に対しては 84.6%が肯定的に回答していた。これらの結果から、多くの学生がデータサイエンス・AI を自分の生活や将来と関わる領域として捉え、一定の学習意義を見出していることがうかがえる。

自由記述でも、「この授業は未来のために役に立つ授業である」「データサイエンスは特別な人だけのものではなく、私たちの生活や社会と深く関わっていることが分かった」「AI やデータを正しく理解し、責任を持って活用する大切さを学んだ」といった意見が見られた。また、AI の利便性だけでなく、ハルシネーションや情報の正確性を確認する必要性について学んだという記述もあり、AI を批判的に活用する姿勢の育成にもつながっていると考えられる。

・理解度に関しては、「データ・AI を扱う上での留意事項の理解」(73.5%)が最も高く、次いで「データサイエンスの事例の理解」(48.5%)、「データの扱い方」(48.5%)、「データサイエンスの概念の理解」(35.3%)、「データ分析手法」(24.3%)であった。昨年度は「データの扱い方」の理解度が最も高かったが、今年度は「データ・AI を扱う上での留意事項の理解」が最も高くなった。生成 AI の活用が急速に進む中、情報の信頼性、著作権、個人情報保護、バイアスなどについて学ぶ機会が、学生の理解につながったものと考えられる。また、将来への活用可能性について84.6%が肯定的に回答していることから、一定の理解と実践的な活用イメージが形成されていると考えられる。

・自由記述では、事例を通して AI やデータサイエンスをより身近なものとして捉えられるようになったという意見や、他の学生の意見に触れることで視野が広がったという意見が見られた。前年度と比較すると、動画教材や事前学習に加え、対面での対話や協働的な学びを評価する意見が増加しており、対面授業の導入は学生の理解促進に一定の効果をもたらしたと考えられる。

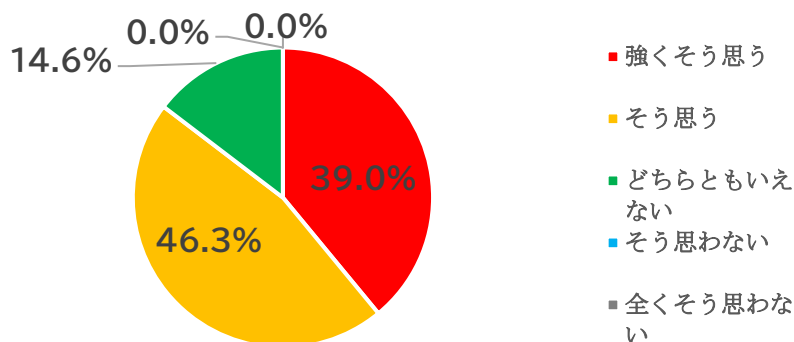
・一方で、改善点としては、AI やデータを実際に操作する演習や体験型活動をさらに増やしてほしいという要望が見られた。これは、授業内で AI を用いた画像生成や物語生成などの具体例を紹介したこともあり、学生が AI やデータ活用について理解を深めるだけでなく、実際に自分で操作しながら学ぶ機会への関心を高めた結果であると考えられる。また、留学生からは、AI やデータサイエンスに関する専門用語を日本語だけで理解することの難しさが指摘され、英語での補足や用語説明の充実を求める声があった。Excel については、1 年次春学期の必修科目で既習の内容ではあるものの、学生間で操作への習熟度に差があるため、必要に応じて基礎的な操作を確認できる支援が有効であると考えられる。

・本科目を学ぶ学生が学習の目的や意義をより明確に理解できるよう、アンケート「この授業を受けて良かった点」の回答としてまとめた以下の内容を、次年度履修者に案内する。

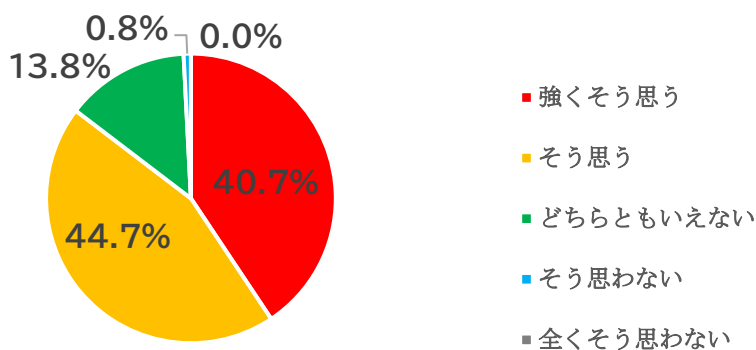
- AI やデータサイエンスの基礎を、初学者にも分かりやすく学ぶことができる
- AI の便利さだけでなく、著作権、個人情報、情報の信頼性、倫理的課題についても学ぶことができる
- AI を活用しながらも、自ら考え判断する力の重要性を理解できる
- 身近な事例や動画を通して、AI やデータサイエンスを現実社会と結び付けて学ぶことができる
- グループワークやディスカッションを通して、多様な考え方に触れながら学ぶことができる
- Excel を活用した実践的な活動を通して、データ活用の基礎を身につけることができる
- 授業後の振り返り活動により、学習内容を整理し理解を深めることができる
- 将来の学習や仕事に役立つ AI リテラシー、情報リテラシー、データ活用力を身につけることができる

注 2) 全学アンケート結果

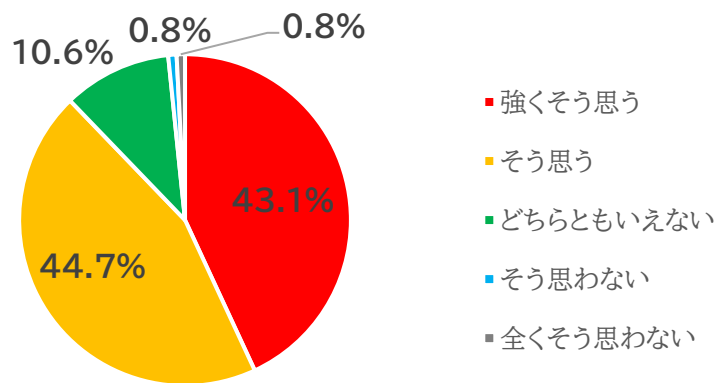
1. 私はこの授業に意欲的に取り組んだ。



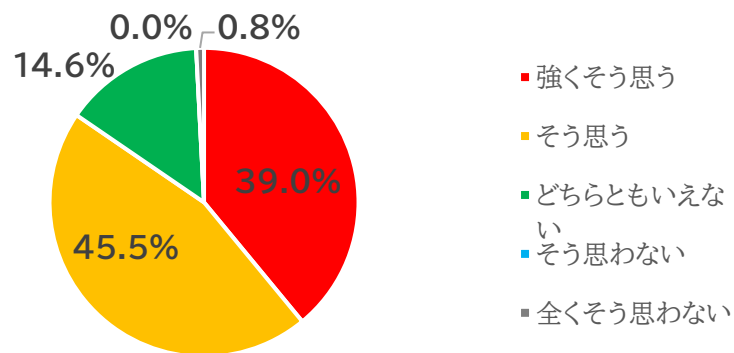
2. この授業を履修して、自分にとって新しい知識(技能)や物事の見方が得られた。



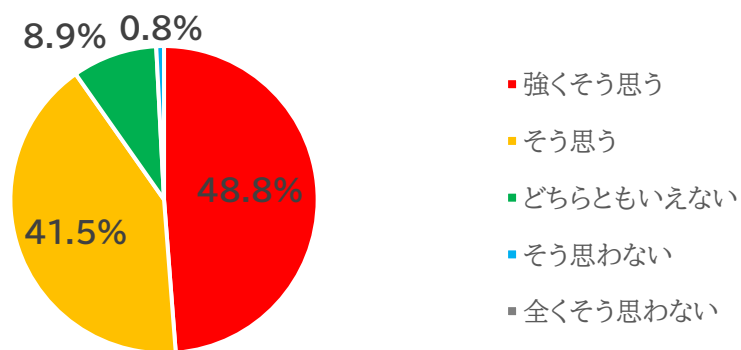
3 この授業の内容や進度は、自分にとって適切であった。



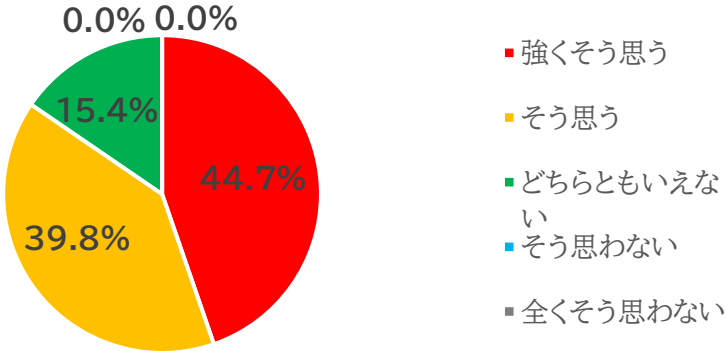
4. この授業の教材または教科書は適切であった。



5. この授業の担当者はシラバスに基づいて授業を行った。



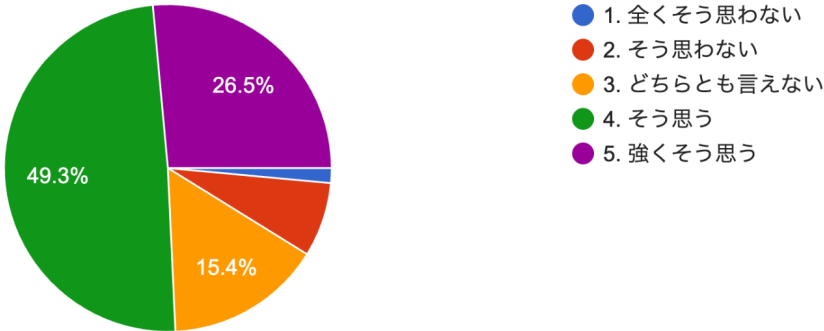
6. 私はこの授業を受講して総合的に満足した。



注 3) 補足オンラインアンケート

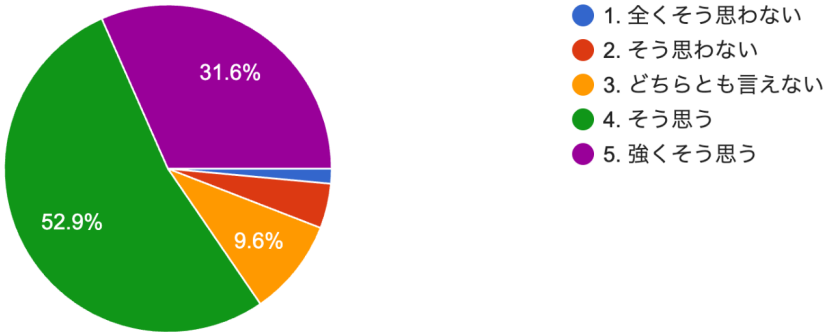
Q1 私はこの授業を受講してデータサイエンスという学問領域に興味・関心を持った。

136 件の回答



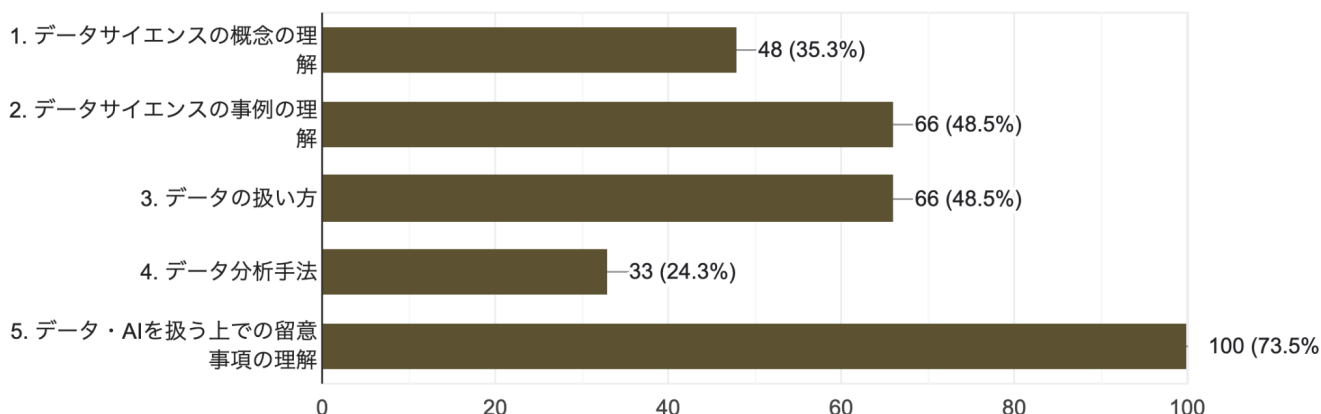
Q2 私はこの授業で身につけたデータサイエンスの知識を自分の将来に活かせると思う。

136 件の回答



Q3 この授業を受けて、身についたと思うことを教えてください（複数回答可）

136 件の回答



3.全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

・入学者数に対する本科目の履修率は1年次全学生必修科目であるため、短期大学においては2023年度に100%となり、大学においては2025年度に100%となる。注4)

注4) 履修率移行状況

年度	大学	短期大学
2022 (R4)	34.4%	64.3%
2023 (R5)	60.4%	100.0%
2024 (R6)	88.1%	100.0%
2025 (R7)	100.0%	100.0%

Ⅲ.学外からの視点

1.教育プログラム修了者の進路・活躍状況、企業等の評価に関する事項

・短期大学においては2024年度以降、大学においては2027年度以降の卒業生調査において、本科目を修得した卒業生の活躍状況の把握が可能である。

2.産業界からの視点を含めた、教育プログラム内容・手法に関する事項

・本学の卒業生が就職した企業等を対象としてアンケート調査を実施している。このアンケートに設問を加える形で、本学卒業生に対する情報リテラシー及び数量的スキルの修得状況を調査し、本科目の改善に活用する。

IV.改善・進化に向けた取組

1.数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること

授業以外において、1年次全学生必修科目「総合キャンパスプログラム演習」においてテクノロジーライターが「デジタル社会の問題を考える授業」を行うことにより、学生の数理・データサイエンス・AIを「学ぶことの意義（動機付け）」や「学ぶ楽しさ」の理解が深まるように努めている。

2.内容・水準を維持・向上しつつ、「分かりやすい」授業とすること

・オンラインアンケートで尋ねたデータサイエンス・AIに関する理解度については、「データ・AIを扱う上での留意事項の理解」が最も高かった。一方で、「データサイエンスの概念の理解」「データサイエンスの事例の理解」「データ分析手法」の理解度は相対的に低い結果となった。今後は、生成AIやデータ活用に関する具体的な事例や実践的な活動を取り入れながら、これらの概念をより分かりやすく理解できる授業となるよう継続的に改善を行う。

3.次年度における更なる学修成果向上における

・昨年まではe-learningによるオンデマンド授業を中心としていたが、2025年度は反転授業を取り入れた対面授業へ移行した。その結果、AIを批判的に活用する姿勢や、著作権・個人情報・ハルシネーションへの理解に加え、学生同士の対話を通じた学びを評価するコメントが多く寄せられた。これは、対面授業を取り入れた反転授業が、知識の習得だけでなく、多様な視点に触れながら学ぶ機会としても機能したことを示している。その一方で、授業内で紹介したAI活用やデータ活用の事例を踏まえ、AIツールやデータを実際に操作する体験型学習を求める声も見られた。次年度は、現在の反転授業の良さを維持しつつ、AIツールやデータ分析を実際に体験できる活動をさらに充実させることを検討したい。

V.参考リンク(文部科学省)

「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベル)実施要綱細目」

https://www.mext.go.jp/content/20260330-mxt_senmon01-000012848_2.pdf